

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】 Reyila Maimaiti(ライラ・ママティ)

【所属】(助成決定時) 奈良女子大学人間文化研究科社会生活環境学専攻

【研究題目】 中国・新疆におけるウイグル族のリプロダクティブ・ヘルスに関する研究

— 避妊・中絶に関する意識と実態 —

【研究の目的】

本研究は、中国・新疆ウイグル自治区(以下新疆と略す)におけるウイグル族のリプロダクティブ・ヘルス(以下R・Hと略す)の実態とその問題点を明らかにするために、避妊と中絶に関する意識や実態を把握し、その問題の原因を考察し、今後のR・H状況を改善するために提言を行うことを目的としている。より具体的には、本研究の目的は、ウイグル族既婚男女の避妊・中絶に関する意識を明らかにすること、避妊・中絶に関する実態を把握すること、避妊・中絶の実態に影響を与える要因を考察することの三点にまとめられている。

【研究の内容・方法】

本研究では研究方法として、まず、既存の統計資料、調査資料、先行研究を収集し分析・考察を行い、分析枠組みを設定した上で、インタビュー調査と質問紙調査の二種類の実態調査を実施した。

内容としては、まず、統計資料や文献をもとに、ウイグル族の避妊・中絶・出産に関わる行動とその背景にあり教育、家族、職業、宗教について概観している。さらに、国際社会におけるR・H/Rの概念の登場、その内容と意義を明らかにし、次に、中国の計画出産政策の登場と発展、またR・H/R概念が中国の計画出産政策に与えた影響について述べている。具体的には、計画出産政策の目標の転換と計画出産のための「良質なサービス」という施策の推進と意義について論述した。続いて中国全体とウイグル族における避妊・中絶の先行研究の検討を行った。新疆では避妊方法としてIUDが圧倒的に多く使用され、中絶率、乳児死亡率、妊産婦死亡率が中国全体の平均水準より高いことが明らかとなった。したがって、このような問題の解決法を探るためには、ウイグル族のR・Hの実態を把握する必要があることを述べた。

次に、本研究の枠組みを構築し、ウイグル族の避妊と中絶の意識と実態やそれに影響を与える要因を探るために、①男女別(夫と妻)の基本属性、②夫の家族計画における関与、③地域社会・文化的要因、④家族計画に関する夫婦の関係という4つの要因を取り上げた。本研究の目的を達成するために、この枠組みに基づいて、避妊・中絶に関する意識と実態をインタビュー調査と質問紙調査によって明らかにし、中絶に影響を与える要因を分析した。

インタビュー調査は、新疆カシュガルに居住する既婚で子どもを持つ20-40歳の女性12名と、30-45歳の男性6名の計18名に対して、2007年8月15日~22日に実施した。質問紙調査は、同様の地域において、妻が50歳以下で出産経験である夫婦250組対象に、2008年3月~4月に面接調査法によって実施した。有効回収票は夫婦221組(442票)、有効回収率は88.2%であった。データはコンピュータに入力し、SPSS11で分析を行った。

【結論・考察】

質問紙調査から、中絶率に関連する要因を探るために、中絶率と避妊に際しての夫婦の合意の有無、夫の避妊経験、宗教の信仰度との関連を検討したが、その結果、中絶率は夫婦の避妊に際しての合意の有無とも宗教の信仰度とも関連がないことを明らかにした。夫の避妊経験に関しては、高学歴の夫ほどコンドームを使用していた。しかし、コンドームの使用経験のある夫の方がその妻に中絶経験が多いということが判明した。

2種類の実態調査結果から、1)夫のコンドームを使用は、それまでの妻の避妊法がうまくいかない時の最終的、あるいは一時的な手段となっていること、2)ウイグル族にあっては、避妊は女性の役割であるとする認識が強く保持され、女性のリプロダクティブ・ヘルスに対する感心が男女ともに低いこと導かれ、3)女性のリプロダクティブ・ヘルスに対する男性の関心の喚起と夫婦の協力による避妊の実行が今後の課題であることをあげた。

最後にこの問題を解決のために、計画出産指導の早期化と指導内容の充実、夫婦対象の計画出産指導の機会の創設、男性の計画出産指導員の養成などの具体的提言が示した。